

創世記 1 章 1 節に啓示されている「イエシュア」

はじめに神が天と地を創造された。

בְּרֵאשִׁית אֱלֹהִים אֵת הַשָּׁמַיִם וְאֵת הָאָרֶץ

(1)「はじめに」と訳された「はじめ」のヘブル語は「レーシート」(תְּשִׁיבָה)で、「初穂」という意味の女性名詞です。イスラエルの三大祭には必ず「初物」が神に奉獻されました。「奉獻する」(קָנַן)=前後に揺り動かしてささげる)にも「復活」が隠されています。「初物」と「復活」は密接な関係にあるのです。

過越の祭りの初穂は大麥の束、初穂の祭り(五旬節の祭り)の初穂は小麦で作った二個のパンです。仮庵の祭りの初穂は果物でした。「今やキリストは、眠った者の初穂(レーシート)として死者の中からよみがえられました」(I コリント 15:20)とあります。初穂となられたキリストは、「いのちを与える霊(御霊)」となられました(I コリント 15:45)。このことによって、天と地を結ぶことが可能となったのです。なぜなら、「最後のアダム」「第二の人」となられたイエシュアが弟子たちに息を吹きかけて、「聖霊を受けよ」と言われた方だからです。これは神の一連の手続きを経てなされた包括的な出来事です。これが「ベレーシート」(תְּשִׁיבָה)に隠されている奥義です。

(2)創世記 1 章 1 節の「ヴァーヴ」(ו)は「天と地を連結する文字」です。天と地、すなわち、神と人とを連結するのは「幕屋、神殿」です。イエシュアが「わたしは、三日でそれ(=神殿)を建てよう」と言われたように(ヨハネ 2:19)、幕屋・神殿はキリストがあかしされているのです。ですから、聖書で最初の「ヴァーヴ」(ו)はイエシュアを啓示しています。文字(もんじ)としての機能は接続詞ですが、霊においてはイエシュアを啓示しています。「たかが接続詞、されど接続詞」で、語彙と語彙、文と文の前後関係のミクロ的なつながりから、出来事と出来事とを連結するマクロ的流れまで意味しています。「ヴァーヴ」(ו)の文字が表す接続詞は、旧約聖書に 5 万以上あるとされています。数えてみようとは思いませんが、それほど異常に多いのです。創世記 1 章 1~5 節までに使われている接続詞は全部でいくつあるでしょうか。実に 14 個です。

(3)また、目的を示す「エート」(אֵת)の文字「アーレフ」(א)と「ターヴ」(ת)はヘブル文字の最初と最後です。「わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである」(黙示録 22:13)とあるように、最初と最後の文字はイエシュアを啓示しているのです。

(4)さらに、「創造する」を意味する動詞「バーラー」(בָּרָא)は、神にしか使われない言葉です。これは「はじめに」を意味する「ベレーシート」(תְּשִׁיבָה)の「最初の三つの子音」と並びが同じですが、この三つの子音(בְּרֵא)は「御子と御霊と御父」を啓示しています。最初の文字「ベート」(ב)は「子・息子」を意味する「ベーン」(בֵּן)、あるいは「バル」(בַּר)の頭文字です。真ん中の文字「レーシュ」(ר)は「霊」を意味する「ルーアツハ」(רוּחַ)の頭文字です。そして三つ目の文字「アーレフ」(א)は「家のリーダーを意味す

る父」を意味する「アーヴ」(אָב)の頭文字です。すなわち「御父」と解釈することができます。イエシュアは「わたしと父とは一つです」(ヨハネ 10:30)と言われました。そして最後のアダムとなられたイエシュアは「いのちを与える御霊となられた」(Iコリント 15:45)ともあります。複数で表される「神」(「エローヒム」אֱלֹהִים)は、神と人とが共に住む家(幕屋・神殿・教会・新しいエルサレム)を「創造する神」であり、その神は三一の神「御父・御子・御霊なる神」だと解釈できるのです。しかも、レーシュ(ר)の文字がなぜ真ん中にあるのかと言えば、御父(א)と御子(ב)を結びつけているのが御霊だからです。

「エローヒム」 אֱלֹהִים = 「バーラー」 (אָב) = 「御子と御霊と御父」

三一の神によって創造される「神と人が共に住む」の物語